

國學院大學學術情報リポジトリ

2023年度国際研究フォーラム「見られることで何が変わるのか--ツーリズムと宗教文化」報告書

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2025-05-21 キーワード (Ja): NDC8:161.3, NDC8:689 キーワード (En): 作成者: 國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001633

自己の回復、山里の回復：修験道とツーリズムの交錯

Restoring the Self, Restoring the Mountain Villages: Intersections Between Shugendō and Tourism

ケイレブ・カーター

(九州大学人文科学研究院・広人文学 准教授)

はじめに

修験道はしばしば日本の山岳信仰の真髄と考えられる。修験道の多彩な側面は、やはり山岳信仰の伝統的な形と見ることができるが、伝統の形しか考えられないと、その外にある要素を見落としていることがある。そのひとつが観光である。近年、宗教学者は、少しずつこの二元論に異議を唱えてきた。⁽¹⁾ 本稿はその研究に重ね、近世と現代の日本の事例を通して、修験道のケースを考察したいと思う。

まず、修験道とは、その言葉自体を見ると「修行して特別な力を得る道」である。その力を得る道を、代表的な修験道学者の宮家準は一般的な百科事典の『日本大百科全書（ニッポニカ）』において次のように説明する：

日本古来の山岳信仰が、外来の密教、道教、シャーマニズムなどの影響のもとに平安時代末に至って一つの宗教体系をつくりあげたものである。このように修験道は特定教祖の教説に基づく創唱宗教とは違って、山岳修行による超自然力の獲得と、その力を用いて呪術宗教的な活動を行うことを旨とする実践的な儀礼中心の宗教である⁽²⁾。

更に項目は続くが、「ツーリズム」に関連する記述は出現しない。それは当然かもしれないが、これが一つの例である。「修験道」を辞典や百科事典で検索すればするほど、「ツーリズム」に関連する記述をほとんど見つけられないことに気付く。これについて考えてみたい。

実は、先行研究、あるいは一般的によく使われているイメージを考えれば、近年まで修験道の定義には、ツーリズムがあまり含まれていなかった。なぜなら、かつての宗教学者たちは、宗教とお金、あるいは宗教とポピュラーカルチャーを別物として考えることが多かったからである。宗教に対する考え方として、物質性よりも精神性、あるいは商売や蓄財よりも清貧、あるいは日常生活よりも教義が重要なものとして考

えられてきた。こうした二元論は、プロテスタント的な価値観の知的遺産として、今でも一定の影響力を保っている。

このような価値観は、私たちが宗教において許容できるものと許容できないものとを区別するのに影響を与えた。その結果、中世の苦行こそが修験道の黄金時代とみなされ、近世の巡礼や村での儀式は、墮落した修験道であると考えられている。しかし実際は、宗教とお金、物質世界、観光といったものは密接に結びついている。このように考えれば、それらがどのように交差し、互いに影響を与えているのか、またそれに目を向けることの重要性が理解できるだろう。

本稿では、修験道とツーリズムの交錯について、いくつかの例を通して考えてみたいと思う。まず、近世の例から始めるが、これによって宗教と観光との結び付きが、単に近代だけの現象ではないことを示す。次に、現代の修験道とツーリズムが出会う3つの例を紹介する。これらの例はすべてまったく異なるものであるため、歴史上の、そして現在における両者の交差が、いかに多面的なものであるかを示している。

1. 近世の事例：戸隠山

まず、江戸時代の戸隠山の事例から確認する⁽³⁾。戸隠山は長野県の北部の山脈に位置し、現在、戸隠を訪れると、深い山に位置する美しい神社が見える。しかし、明治初年に神仏分離が施行される以前は、戸隠山は天台宗によって管理され、その中で修験道は山の儀式、経済、アイデンティティの一部であった（図1）。

18世紀に戸隠が人気の巡礼地となると、参拝者を案内したのは修験道の山伏であった。戸隠は、登るのが技術的に難しい山であるため、もともとは修験者だけが山頂にのぼることができた。ただ、1701年からは、修験者が参拝者を案内して、両界曼荼羅と言われた高妻山と乙妻山に登るようになった。同時に、女人禁制が厳しくなり、これらの山に登ることが許されたのは男性だけであった。女性は女人堂までしか、参拝することができなかった。

いずれにしても、修験道が江戸時代の山岳巡礼と結びついていたことが明らかになる。これは、イメージとアクセスの関係であった。修験者のイメージは、他界的な山伏であり、困難な地形を進み、山の神と仏と直接交流し、山から特別な力を得る能力を持つ者たちであった。とにかく、全国の霊山が巡礼のために開かれたこの時期、山伏は山に登り、「講」と言われる団体を案内する、技術的専門知識を持つ存在だった。

このように、江戸時代、巡礼は一種の宗教的な観光であった。庶民が村から離れることを許された数少ない方法のひとつであり、美しい景色を眺めながら長い道のりを旅することが多かった。そして有名な寺社にお参りする以外の時間は、道中で酒やギャンブル、遊郭などを楽しんだ。修験道は、歴史家ナムリン・ホが江戸時代の「prayer



図1 江戸時代後半の地図を明治時代に写した物。(著者個人蔵。写真は Hill, Lachlan 撮影。)

and play」(祈りと遊び)と呼んだもののへのアクセスポイントのひとつであった⁽⁴⁾。

2. 現在の修験道とツーリズム

もちろん、今日の修験道は、江戸時代のそれとは大きく異なっている。修験道は明治時代に禁止され、1946年まで公認されなかった。そのため、修験者は歴史的な先例を調査することと、現代の人々の関心に対応することとを、組み合わせて活動している。言い換えれば、伝統に従うことと、新たなイノベーションによって適応することとを組み合わせている。

「伝統」と言えば、修験道の衣を着ること、峰入り、柴燈護摩、火渡りなどの儀式を行うこと、修験道の史跡で地域の伝統を復元することなどが例として挙げられる。同時に、「イノベーション」について言えば、自然、アウトドア活動、癒し、スピリチュアリティなど、現代の人々の新しい関心に注目することと結びついている。こうした関心に焦点を合わせるならば、近代的な観光の形態と、修験道の再興とは、交差している。

2-1. 新しい講

一つ目の例は東京を本拠として活動している新しい講である。創設者は東京に住んでいる社会人であり、金峯山寺で正式に修行を積んだ修験者でもある人が、10年以上前に始めた講である。匿名にするために M さんと呼ぶことにする。講の主な活動は法螺貝の稽古で、M さんは市内やオンラインで定期的に法螺貝のセッションを開いて教えるほか、週末や三連休には葛城、吉野、戸隠などへの旅を「先達」（つまり修験道のリーダー）として企画している。会員たちは、年齢も性別も職業もさまざまで、多くは 30 代から 40 代で、音楽、デザイン、建築などクリエイティブな仕事に就いている人も多い。そして、口コミで講の事を知る事が多い（図 2）。

この講に参加し、また様々な山々で、他のグループを観察した経験から、私は修験道の再興に二つの大きなパターンがあることに気づいた。一つ目は、「地域性を意識した再興の試み」である。修験道が明治時代に禁制となったことを受けて、各地で修験道の伝統が、一度途絶えた。しかし 1980 年代から現在にかけて、各地で復活している。その場合、ほとんどの山には、直接的な修験道の記憶はないが、修験道を復活させたいという関心を持つ人々が存在しているため、修験道の歴史的な中心地金峯山の修験者がこれらの地域を訪れ、修験道の復興を指導している。

戸隠と M さんの場合、神社の神主は 2003 年に古くから行われていた「柱松」という祭りを復活させた。しかし、神主と修験道とのつながりがなくなっていたため、M



図 2 戸隠山の九頭竜社で参拝している M さんの講。（著者撮影。2019 年。）

さんに柱松の中で法螺貝を演奏することで講に参加してもらうことにした。この祭りは3年ごとに開催され、Mさんの講も参加し続けている。この行事を通して、修験者と講は、神社に、その土地の過去のある面とのつながりを提供している。

二つ目は「自然と精神世界への関心の取り込み」である。例えば、一般人を山に案内し、山岳信仰の伝統に基づいた精神的な体験をさせるというものである。そこで彼らは神仏と交わり、自然の中で自分を取り戻し、そして山、美しい村、郷土料理、伝統的な宿泊施設を楽しむことができる。Mさんの講の参加者に話を聞くと、確かに彼らは、旅のハイライトとしてこれらの要素を挙げていた。

2-2. グローバル社会の中の修験道

二つ目の例として、ヨーロッパ出身の女性修験者で、先達をしているTさんを取り上げる。Tさんは熊野に住み、熊野や金峯山に関連する修験者に指導を受けている。仕事として、吉野地方や熊野地方を訪れる各国からの団体を案内している（図3）。

Tさんは、海外の人々の、修験道や自然のスピリチュアリティへの関心に応えている、外国人および日本人の行者の一人である。このような宗教ツーリズムは、日本だ



図3 修験道の創始者である役行者の母を祀る母公堂であり、著者は生徒たちと一緒にTさんに吉野の聖地と古道へ案内された。（著者撮影。2022年。）

けでなく世界的に見られる現象である。例えば、今は誰でも中国の道教の山を訪れて気功を学んだり、インドでヨガ・リトリートに参加したりすることができる。2004年に、吉野・熊野はユネスコの世界遺産に認定され、このような世界的なスピリチュアル・デスティネーションの風景の中に位置付けられ、宗教ツーリズムの目的地の一つとなった。

ユネスコの目的は、重要な文化遺産を保護することであるが、もちろん観光客を誘致することも、ユネスコの認定を得るための重要な動機となっている。その意味で、修験道は観光・経済にとって貴重な資源であり、修験道と観光の研究者、天田顕徳氏の言うところの「文化資源化」につながっている⁽⁵⁾。日本を訪れる観光客が、このような画像を目にすると、スピリチュアルな体験ができる神秘的な場所という感覚が呼び起こされる。

こうして、世界中の人々が、以前よりも修験道について知るようになっていく。ある地域の宗教的遺産について知りたい人と、体験したい人もいる。また、Tさんのように修験道をより深く紹介してくれる人を求める人もいる。いずれにしても、長期的な経済衰退に直面している地域の住民にとっては、経済的なメリットがある。ちなみに、以上の二つのケースには、近世における修験道との連続性、あるいは共通性が見られる。それは、修験道の先達が一般人を山に導くということである。そして、そのような活動を通して、修験者自らも修行を行っている。

2-3. 修験道・登山・企業

山への関心がアウトドアスポーツにつながるが多いため、消費者の需要に応えようとする新世代の企業が生まれている。そのひとつ、株式会社ヤママップ（YAMAP）はハイキングと修験道を結びつけようとしている。YAMAPは、ハイカーを支援するデジタルプラットフォームとして2013年に設立された。YAMAPのアプリは日本で最も人気のあるハイカー向けアプリとなっている。このアプリで、ユーザーはハイキングの詳細情報を検索し、地図をダウンロードし、GPSで自分のハイキングを記録することができる。YAMAPはこの技術的な機能だけでなく、ユーザーが情報や写真を共有し、登山文化を中心とした共通の価値観を育むことで、コミュニティの構築を試みている。興味深いことに同社は、修験道を、このコミュニティとユーザーに意義をもたらす重要な手段だと考えている。

このためYAMAPは、修験道で知られる山村地域で、地方活性化キャンペーンを実施している。例えば、歴史的な修験道ルート（「峰入り」と呼ばれる）を復元し、先達と連携して日帰り、あるいは宿泊付きの修験道ガイドツアーを開発したり、修験道の特集した記事をオンラインマガジンに掲載したり、修験道に関する高画質の動画をYouTubeにアップロードしたりしている。

その中心は紀伊半島の吉野地方と葛城山、そして九州の英彦山である。これらはすべて修験道の歴史的な中心地であった。また、これらの地域は、地方の過疎化や、地域経済の停滞の影響を受けている地域であり、YAMAP は修験道の文化遺産を、観光資源、かつ潜在的な利益の源泉と見なしている。

英彦山の例を挙げると、中世から近世にわたる二つの峰入（春峰と秋峰）があり、近年、地元の修験者たちが、明治時代には廃れてしまっていたこの二つのルートを復活させた。YAMAP は 2021 年から、YAMAP と英彦山神宮と福岡県観光連盟の共同企画により、この二つのルートと、もう一つの「御汐井取り」という伝統的な行事によるルートを合わせて、英彦山に関わるこれらの三ルートをデジタル地図、短編映画、オンライン記事などを用いて宣伝している。

YAMAP は他の方法でも英彦山につながるルートを宣伝している。2023 年の秋、ルートを歩いて英彦山神宮を訪れると、YAMAP が製作した限定版の手ぬぐいが無料でもらえた。また「“英彦山巡礼路” デジタルバッジキャンペーン」も行われている。このデジタルバッジは、期間中に YAMAP アプリで活動記録を取りながら、指定のランドマークを通過すると手に入れることができる。

更に、YAMAP は「山伏が歩いた峰入道を辿るツアー」などのパッケージツアーを提供することを計画している。修験道と YAMAP のつながりを研究している九州大学人文科学府博士課程の学生が、2022 年 12 月にそのようなトライアルツアーに参加した(図 4)⁽⁶⁾。彼は、YAMAP がツアーを通して本物の修験道の体験——彼らは「修験感」という言葉を使った——を作りたいと熱望していることを知った。とはいえ、商業的に成り立つだけの参加者を集めるのは難しいようである。

しかし、いずれにしても、YAMAP はこうした様々な取り組みを通じて、ユーザーに英彦山修験道を紹介し、「歩くことと祈ること」を促している。このメッセージは YAMAP の企業使命の中心にあるようである。創業者の春山慶彦氏は修験道に特別な関心を寄せており、2022 年のインタビューでこのように語っている。

英彦山は YAMAP の本社がある博多からも近く、修験道の名残りを色濃く残す歴史と自然、その両方の魅力を併せ持つ人気の山です。英彦山で受け継がれてきた修験の文化は、私たち人類の財産でもあります。英彦山には、近代のアルピニズム的な登山よりもっと前の、日本人が持っていた自然と一体化する登山観が今も残っています。修験道にスポットライトを当てることで、スポーツでもない、ただ自然を楽しむだけでもない、「歩くこと」と「祈ること」がつながっている登山を、現代によみがえらせることができたらと思っています⁽⁷⁾。



図4 YAMAPの修験道のトライアルツアーで山伏が英彦山の道を歩いている。(Him, Han Cheuk 撮影。2022年。)

この文章で春山は、現代におけるアウトドアスポーツの大きな特徴として、アウトドアスポーツに、単なる肉体的な動き以上の何かを見出すことを挙げている。例えば、日常生活を超越し、精神的な動機を満たす、といった要素である。このようにYAMAPは、山岳活動と、精神性という人々の二つの関心を相互に関係させることで、古い伝統である「修験道」と、今日人気であるアウトドアスポーツを結びつけている。YAMAPを小規模な講の運営に比べるならば、YAMAPは世話人、さらにはデジタル先達の役割を担い、ハイカーの大規模なコミュニティに修験道を紹介し、彼らのハイキングに新しい意味をインプットしている。

おわりに

『宗教年鑑』に掲載された統計によると、古い山岳信仰の講の会員数は長期間にわたって減少し続けている。その一方で、「修験道」というものは、国内外を問わず、一般の人々の関心を少しずつ集めるようになっていく。霊山に近い地元の住民たちは、自分たちの過去とつながる方法として修験道を利用してきた。他方で、現在において

修験道に関わる「個人」に目を向けるならば、彼・彼女は、修験道を、山を訪れ、精神的な回復を得るための方法として捉えている。

修験道はまた、観光の可能性が認識されるにつれ、大規模な経済プロジェクトや企業プロジェクトにも組み込まれてきた。しかし、このような大きなプロジェクトが成功するかどうかは、そもそも修験道が、より小さな共同体や、個人のレベルにおいて、どれだけ共感され、そしてどれだけ支えられているのかによって、決まるだろう。

注

- (1) 山中弘編、『宗教とツーリズム：聖なるものの変容と持続』、世界思想社、2012 年。Bruntz, Courtney, and Schedneck, Brooke eds. *Buddhist tourism in Asia*, University of Hawai'i Press, 2020. Reader, Ian. *Religion and tourism in Japan: Intersections, Images, Policies and Problems*, Bloomsbury Academic, 2024.
- (2) 宮家準、「修験道」項『日本大百科全書（ニッポニカ）』、小学館（Shogakukan Inc.）. *JapanKnowledge* 上で 2024 年 5 月 23 日に閲覧。
- (3) Carter, Caleb Swift. *A Path into the Mountains: Shugendō and Mount Togakushi*, University of Hawai'i Press, 2022.
- (4) Hur, Nam-lin. *Prayer and Play in Late Tokugawa Japan: Asakusa Sensōji and Edo Society*, Harvard University Asia Center, 2000.
- (5) 天田顕徳、『現代修験道の宗教社会学：山岳信仰の聖地「吉野・熊野」の観光化と文化資源化』、岩田書院、2019 年。
- (6) Him, Han Cheuk, "Revitalizing Shugendō in the Digital Age: The Case of Yamap," 九州大学人文科学、修士論文、2023 年。
- (7) 米村奈穂、「英彦山再興プロジェクト：峰入り道をゆく巡礼ツアー」、*YAMAP Magazine*、2022.02.28、<https://yamap.com/magazine/34219>。